

新編

修身教典

尋常  
學校用

卷四

T1A3

22

F 85

圖書 和岡書 遡



a 1 3 8 0 3 2 9 0 0 4 a

福岡教育大学蔵書

# 勅語

## 新修身教典 尋常小巻 四目次

第一課 わが 皇室	一	第十六課 鈴木今右衛門氏 夫婦 (二)	四十六
第二課 菅原道真公 (一)	四	第十七課 鈴木今右衛門氏 夫婦 (二)	四十八
第三課 菅原道真公 (二)	七	第十八課 博愛衆に及ぼせ	五十
第四課 學を修めよ	十	第十九課 白河樂翁公 (一)	五十二
第五課 伊藤仁齋先生 (一)	十二	第二十課 白河樂翁公 (二)	五十五
第六課 伊藤仁齋先生 (二)	十五	第二十一課 白河樂翁公 (三)	五十八
第七課 伊藤仁齋先生 (三)	十八	第二十二課 公益を廣めよ	六十二
第八課 伊藤仁齋先生 (四)	二十二	第二十三課 白河樂翁公 (四)	六十三
第九課 衆教なるべし	二十五	第二十四課 白河樂翁公 (五)	六十七
第十課 伊藤仁齋先生 (五)	二十七	第二十五課 職業のたふときこと	六十九
第十一課 伊藤仁齋先生 (六)	三十一	第二十六課 公衆衛生	七十二
第十二課 夫婦相和すべし	三十四	第二十七課 外人に對する心得	七十三
第十三課 伊藤仁齋先生 (七)	三十六	第二十八課 國民のつとめ	七十五
第十四課 楠木正成卿 (一)	三十八		
第十五課 楠木正成卿 (二)	四十二		



朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ  
我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ  
我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝  
ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉已レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ  
學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ  
世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ヲ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ  
奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良  
ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守ス  
ヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民  
ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

## 御名 御璽

### 新編 修身教典尋常小學校用 卷四

#### 第一課 わが 皇室

わが 皇室は萬世一系の皇統をうけつ  
ぎたまひて、二千五百餘年のむかしより、今  
日に至るまで、常に仁愛を以て、國たみの上  
にのたませたまへり。

今上天皇陛下は、百二十一代の 天皇に  
ましまして、御即位のはじめより、日夜國

民を安らかに治め給はんとて、大御心をなやましたまふ。わがくに今日の如く、何事も、威になりて、強き國となれるは、みな、陛下の御めぐみなり。

又、地震・火事・大水などの如き、わざはひあるときは、いたく、大御心をなやまさせたまひ、陛下をはじめ奉り、皇后陛下、皇太子殿下、皇太子妃殿下よりも、御手元金を下して、窮民をすくはせたまふ。

かくの如く、人民をいたはりたまふことは、實にありがたきことにあらずや。

われ等は、かゝるめづたき、大御代に生れ、かゝるありがたき、皇室の下にあるをよろこび、よく臣民のすづきつとめを盡して、海よりも深く、山よりも高き、皇恩の萬一にむくい奉らんことを、心がくづきなり。



第二課 管原道真公 (一)

管原道真公は、參議是善卿ヨシヨシキョウの第三子にして、其の才人にまさり、行儀もまた正しかりき。

公はかく賢かりしが上に、幼より學問を勵みて、其の勉強人なみにすぐれしかば、父上は深く之を愛して、日夜その成人を樂まれき。



公の學問は、年と共に進みて、十一歳の御時には、見事なる詩を作られけり。されば、菅原の家には、よき子を持てりとして、うらやまぬものなかりき。

公は、また、武げいにも、すぐれられき。ある時、公をねたむものありて、公に弓をいさせ、はぢか、せんとせしに、公の射られし矢、皆<sup>下</sup>的にあたりければ、人々、おどろきけり。

### 第三課 菅原道真公 (二)

公は、學問も、行狀も、人にすぐれければ、宇多天皇の御心になほひ、その位も官もおひ／＼に進まれき。

まもなく、宇多天皇御位を去らせたまひて、醍醐<sup>ダイゴ</sup>天皇代りて、立ちたまひき。

その頃、藤原<sup>フジワラ</sup>氏の勢、さかんにして、わがまのふるまひ、多かりければ、醍醐天皇之



をなげかせたまひ公の官をすゝめて右大臣となし、政をとらしめられしかば、公は深く心に感じ、身をさゝげん、君恩に報い奉らんと日夜心をくだかれき。

然るに、時の左大臣藤原時平トキヘラは、公の評判よきをねたみて、たびく、ざんげんを申しあげければ、天皇は、遂に、公を、筑前の太宰府クザイに下し給ひき。公の悲、如何なりけん。

されども、公は、少しも怨み奉ることなく、つゝしみて、太宰府に下られ、かつて、賜はりし御衣にむかひて、毎日、礼拝をおこたられざりきとぞ。



第四課 學を修めよ

人は萬物にすぐれたるものなれども、學問を修めて、智識をみがかざれば、賢き人となりがたし。人と生れながら、愚にて、一生をすごすは、口をしきことならずや。

學問を修むれば、物ごとの道理を知るのみならず、廣く、世の中のことを悟りて、うまれつき、愚なる人も、賢き人となることを得べし。されば、幼き時より、すこしのひまをもをしみて、よくべんきよし、ゆくすゑりつはなる人となりて、世のため、國のために、力をつくすべし。

皇后宮御歌

金剛石も みがかずば、  
玉のひかりは、 そはざらん。



人も學びて、後にこそ、  
まことの徳は、あらはるれ。  
時計の針の、たえまなく  
めぐるが如く、ときのまの、  
日かげをしみて、はげみなば、  
いかなるわざか、ならざらん。

第五課

伊藤仁齋先生

(一)

伊藤仁齋先生は、十一歳のとき、始めて、師  
につきて、學ばれしが、朝は、早くより、夜は、お  
そくまで勉強して、つねに、怠ることなく、門  
外に出でられざること、殆、十年に及びたり  
き。親類の人々は、皆、いさめて「學者となりて、  
まづしきに苦まんよりは、醫者となりて、ゆ  
たかにくらすにしかず」といひき。



されど、先生は如何なることにあふとも、  
一旦志したる目的をつらぬかん。とて、少し  
も、その志をかへらるゝことなく、家を弟に  
ゆづりて、別居し、これより、ますます、讀書を  
はげまれき。

第六課 伊藤仁齋先生 (二)

先生、幼きときより、父母に事ふること、は  
なはだあつかりき。



或る時、母、病にかゝられければ、先生は大に、これかなしき、看病に、力をつくされき。この時、細川<sup>ホツカバ</sup>越中守<sup>エツチノカミ</sup>より、禮をあつくして、先生を招きたれども、母の病氣中なればとて、これをことわり、孝養に怠なかりき。

然るに、そのかひもなく、母は、まもなく、此の世を、去られしが、死する際に、兩手を合せ、先生の孝養あつきを謝せられきといふ。



先生は母の喪いまだすまざるに、又もや父を失はなければたもとの涙かわくひまなく、父母の喪に服せられしこと、前後合せて四年なりき。

孝行のしたい時分に、

親はなし。

第七課

伊藤仁齋先生

(三)

先生、天氣よき時には、常に門人をともにひて、野外を散歩することを好まれき。

或る日、門人五六人を引きつれて、或る寺に入り、佛に向ひて、拜礼せられき。

門人、これをあやしみて、「先生は、つねに佛を好みたまはずして、其の非をあげたまふにも似ず、今佛を拜したまふは、如何なる御心にさふらふぞ」と問ひければ、先生は、「佛は

もとより、儒に異なり。されども、其の地をすぎ、其の主に禮せざることあるべきか」と答へられき。

先生の學問の大に、世に行はるゝに至りし時、土佐の大高坂清助オホタカサカといふ人、書をつくりて、大に先生の學風ををしりき。

門人、これを持ち來りて、先生に示し、しきりに、いひわけの書を作られんことを、勧めき。先生、笑ひて曰はく、「若かれのいふところ、正しくして、われのいふところ、正しからずば、かれはわれに取りて、益友なり。若また、われのいふところ、正しくして、彼のいふところ、正しからずば、かれ、おのづから、これを、さとする時あるべし。何ぞ、かれををしり、われを立つることをせんや。とて、さらに、心にかけてられざりき。」

第八課

伊藤仁齋先生 (四)

徳大寺左大臣、學問を好まれ、時々、多くの學者をあつめて、討論せしめられき。その時、先生は、年若ながらも、其の席に召されき。

諸學者は、はじめは、色をやはらげ、聲をひくくしいかめしく、ものいづとも、終には、各顔色をかへ、聲をあらゝげ、形をくづして、いひつゝのること、恰けんくおのごとくなりき。



其の中にありて、先生はひとり心を平かにし、氣をしづかにして、少しもかたちをくづされざりければ、其の坐につらなれるもの、これを見て、わが身のかろがるしさを、はぢざるはなかりき。

君子重からざれば、

威あらず。

第九課

恭敬なるべし

人は常に心に禮を守りて、その行をつゝしむべし。おのれのちゑがくもんにほこりて、人をあなどり、或は人の見ぬところなりとて、あしき行をなすべからず。すべて何事もひかづめにし、又つねに、その身をかづりみ、過あらばすみやかに、これを改むべし。ことばは、おもふことを、かよはするもの



にて、まことに、重寶なるものなれども、一言のまちがひより、大なるわざはひを起すこともあればよく、これをつゝしむべし。すべて、ことばは、おだやかにして、すくなきをよしとす。ことに、人をとしるは、害ありて、益なきことなれば、最つゝしむべきことなり。

## 口は、禍の門。

### 第十課

伊藤仁齋先生 (五)

先生、學成りて、後、塾<sup>ジツ</sup>を開きて、門人に教へられき。その頃、先生の學深く、徳高きこと、かくれなくなりて、來り學ぶもの、甚多かりき。先生、教へて倦まざること、四十餘年、其の門人の數は、千人にも及びきとぞ。

先生ある時、夜道を行かれしに、刀をもてゐるもの、四五人、出て來り、先生をおびや

かして、汝のもてる金を、皆、出すべし。もし、金  
なくば、其の衣服を渡せ。と、せまりき。

先生、おだやかに、今、金を持たねば、この衣  
服を、つかはすべし。されど、一つ、聞きたきこ  
とあり。汝等は、何を業とするものなるか。と、  
問はれければ、賊は、われ等は、毎夜、往き來の  
人の、衣類、金錢を、うばふことを、業とするも  
のなり。と、答へき。



この時先生さらばといひて衣服をぬぎてあたいられんとせしに、賊これを止めて「御身は何人にておはすか。」とひければ、先生は「われは儒者なり」とてねんどろに人の行ふべき道をさとされたりき。

賊ども首をたれ、涙を流していふよし、御身もわれも同じ人にして、其のするところ異なること、かくの如し。われ等まことにこれをばづ。なにとぞ、今までの無礼をゆるしたまへ。今より後は、行を改め、つゝしんで、先生の門人とならん。とて、終に心を改めて、善き人となれりきとぞ。

第十一課 伊藤仁齋先生 (六)

先生の夫人は、しとやかにして、よく女の道を守りし方なりき。

先生の家は、きはめて貧しくして、年の暮

に餅をつくことも出来ざるほどなりしか  
と、夫人は、少しもこれをうれつとせず心を  
用ゐて家を治められたりき。

先生が貧しかりしにもかゝはらず、家事  
を顧みることなく、心を學問に專にするこ  
とを得られしは、全く夫人内助の力なり。

夫人又其の心をつくして、先生に仕つら  
るゝこと、多年一日の如くなりしかば、先生  
も亦夫人を愛せらるゝこと、極めて深く、其  
の睦じきさま、見る人感ぜざるはなかりき。  
かく一家のうち睦しくして、よく和合せ  
るが故に、先生の男子五人も、亦互に愛敬の  
道をつくし、學問をつとめて、怠らず、そろひ  
もそろひて有用の人となられき。

笑ふ門には福來る。

第十二課 夫婦相和すべし

夫婦は一家を組み立つる本にして、一家のさかゆるもおとろふるも皆その和すると和せざるとによりて分るゝものなり。されば妻は其の夫をうやまひ一たび夫の家に嫁入りし後は其の家をわが家と定めて夫と苦樂を共にし如何なる辛苦にあふとも立ち去るべからず。

又女はとかくかよわきものなれば夫たるものはよく其の妻をいつくしみいたはりて其の心をなぐさむべし。

かくの如く夫婦のながむつまじければ一家のうちおのづからよくをさまりて其の家のさかえゆかんこと疑なかるべし。

夫唱へ婦隨ふ。



第十三課

伊藤仁齋先生 (七)

かつて、先生の近所の人々、相集まりて、其の合ひ持ちの井さらへをせしとき、先生は、「われもおよばずながら、手つだひせん」とて、出でられたりき。

人々、これを見て、皆口をそろへ、「これは、私どものみにて、いたすべし。先生の御手をわづらはしまゐらするほどのことにはあらず」といひて、これをとゞめたりき。

其のとき先生は、「皆様の御深切なるおぼしめしは、がたじけなけれども、自分も、また、毎日、この井をつかひ居るうへは、手つだひせざれば、こゝろよからず」といひて、日の暮るゝまで、人々とともに、かひがひしくはたらかれき。

されば、近所の人々は、先生が、少しも、おの

れの學徳にほこらずして、いやしきわざをも、厭はれざるに感じ入り、これより、先生を尊ぶこと、いよく、深くなりきといふ。

第十四課

楠木正成卿 (一)

楠木正成卿は、河内の人にして、幼き時の名を多聞タモンといひき。

卿、幼より、武勇人にすぐれ、年長じて、兵衛尉サウに任ぜられ、其の名つとに、近國チカクニにきこえたりき。

後醍醐天皇の御時、北條高時カチヨウタカトキといふもの、わがまゝのふるまひ、多かりければ、天皇これを滅さんことを、はかりたまひ、卿を召して、そのことを、まかせたまひき。

卿は、つゝしみて、御うけいたし、わたくしの生きてある中は、ごしんばいあそばすにおよばす。と、申し上げければ、天皇は、すな

四十一會社三十分會

はせたまひしかば、卿は攝津の國まではせ

四十一 合資及合股反

ぬらされき。

第十五課

楠木正成卿 (二)

高時亡びて、天下、しばらくをさまりけるが、やがて、また、足利尊氏（この名、タカウジ）といふもの、そむきて、世はふたたびみだれたりき。

卿は、しばらくこれとたゝかひて、遂に、これをうちらはれしに、いく程もなく、尊氏九州より、大軍を率ゐて、せめ上りければ、

天皇、又、卿に命じて、これを防がしめ給ひき。

卿はこの度のいくさには、生きてかへらじと、かくごせられければ、其の子正行卿を、櫻井驛に

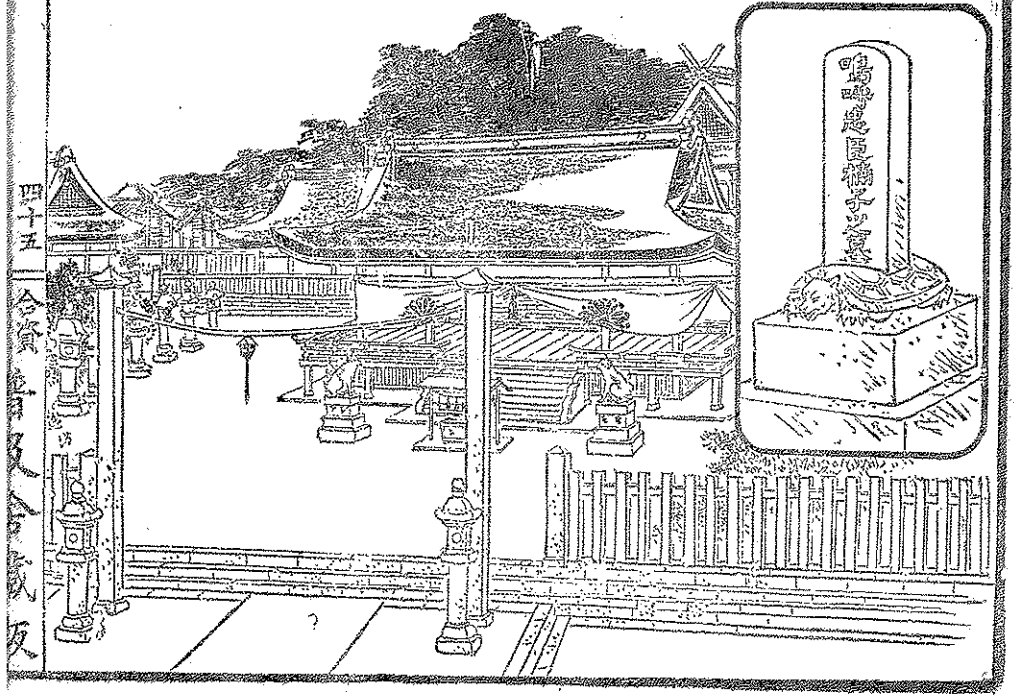


よびよせて、「われ死せば、尊氏の世となるべ  
けれど、成長ののちは、必、父の忠義をつぎ、  
大君の御心を、安んじ奉れ。」と、こまゝくに、さ  
として、別をつげ、湊川へむかはれき。

卿は、まづ、尊氏の弟直義の、ひきつれたり  
し、二十萬人の兵に、打ちむかひて、いさまし  
くたゝかひ、十六度まで、うちかちたれど、敵  
は、目にあまる大軍なれば、味方は、おひく

うちとられて、のこ  
りすくなくなりた  
りき。

卿は、今は、これま  
でなり。」とて、或る家  
に入り、弟正季とぞ  
しちがつて、うせら  
れき。





今上天皇陛下は深く卿の忠義をよみせられ社をたててこれを祀らせたまひ、湊川神社の神号をたまひて、別格官幣社に列したまひたり。

第十六課

鈴木今右衛門氏夫婦 (一)

むかし、羽前ウゼンの國に鈴木今右衛門氏とて、なまけぶかき人ありき。

あるとし、世の中きつんにて、うゑとにす

るもの多かりしかば、今右衛門氏は田畑をうりて、米を買ひ、多くの人をすくひき。

かくて、田畑も賣りつくしければ、つひに家の諸道具及衣類までも、うりはらひき。

今右衛門氏の妻も、また夫と、その心を同じくし、あるとき、餘せるはれぎをも、賣らんとせしを、今右衛門氏は「せめてはれぎ一とほりは残しおくべし」と止めしに、妻は「これ

を賣らば、また、二三人を、すくふことを得べし。とて、つひに、これをも、賣りき。

第十七課 鈴木今右衛門氏夫婦 ㊦

寒さいとはげしかりけるあさ、つれのひとへもの、一まいをきたる、十二三の女子、ふるひながら、かど口にて、物をこひき。今右衛門氏夫婦は、これをあはれみ、如何にもし、て、すくひたしとおもつども、與ふべきもの

とては、更になかりけり。

妻はふと、吾が娘

の、わたれ二まい

を、著たるを見て、む

すめにむかひ、をな

たは、わたれ二つ

かさねて、あなた、か

に著たり。かの女子



は、ななたとおなじ年ごろなれば、一つをぬぎて、あたはずぬ。といひければ、むすめは、心よげに、これを、あたつたりきとぞ。

第十八課 博愛衆に及ぼせ

人に、恩をほどこすは、まことに、たふとむべき善行なり。世には、不仕合のうちつゞきて、まづしき身となり、衣食にさへ、不自由なるもの、みなしごととなりて、たよるべきところ、なきものなどおほし。これ等の、不仕合なるものを、助くるは、人の、よろこびてなすべきことなり。

わが身ひとり富みて、おごりをきはめ、人のなんぎを見て、しらぬふりするは、人情なき人といふべし。ことに、地震、火事、大水などに、多くの人々、なんぎせる時などには、おのおの、その身分にしたがひて、財物をいだ

し、これを救ふべし。

第十九課

白河樂翁公ラクオー (一)

白河樂翁公は七歳の頃より、師につき、  
學問せられき。

そのころ、遊びたはむれらるゝさま、自ほ  
かの子どもらの如くならざりければ、父君  
母君をはじめ、多くの人々より、未だのもし  
く、思はれられたりき。

ある時ひとり、  
思はるゝより、わ  
が國はさらなり。  
もろこしまでも  
知らるゝほどの、  
大業を成さずば  
人と生れしかひ  
なかるべし。とて、



かたく志を立てられき。

公一旦志を立てたる後は如何なる困苦にあふとも必てれをつらぬかんと決心にて毎日朝早くおきて書を読み食事をはればまた机にむかひ日暮れて後は晝の間讀まれたる字をかきぬきして復習せられ平生食事のときも必書物をかたはらにおかれたりき。

公が後學徳共に高き人となられしは全く一旦立てし志を堅く守られしによる。

人は一代名は末代。

第二十課 白河樂翁公 (二)

公は學問の外に武げいをも勵まれその頃の柔術の名人鈴木氏の門人となられき。或る時鈴木氏はその門人に命じけいこにかこつけて二三度も公をなげさせき。





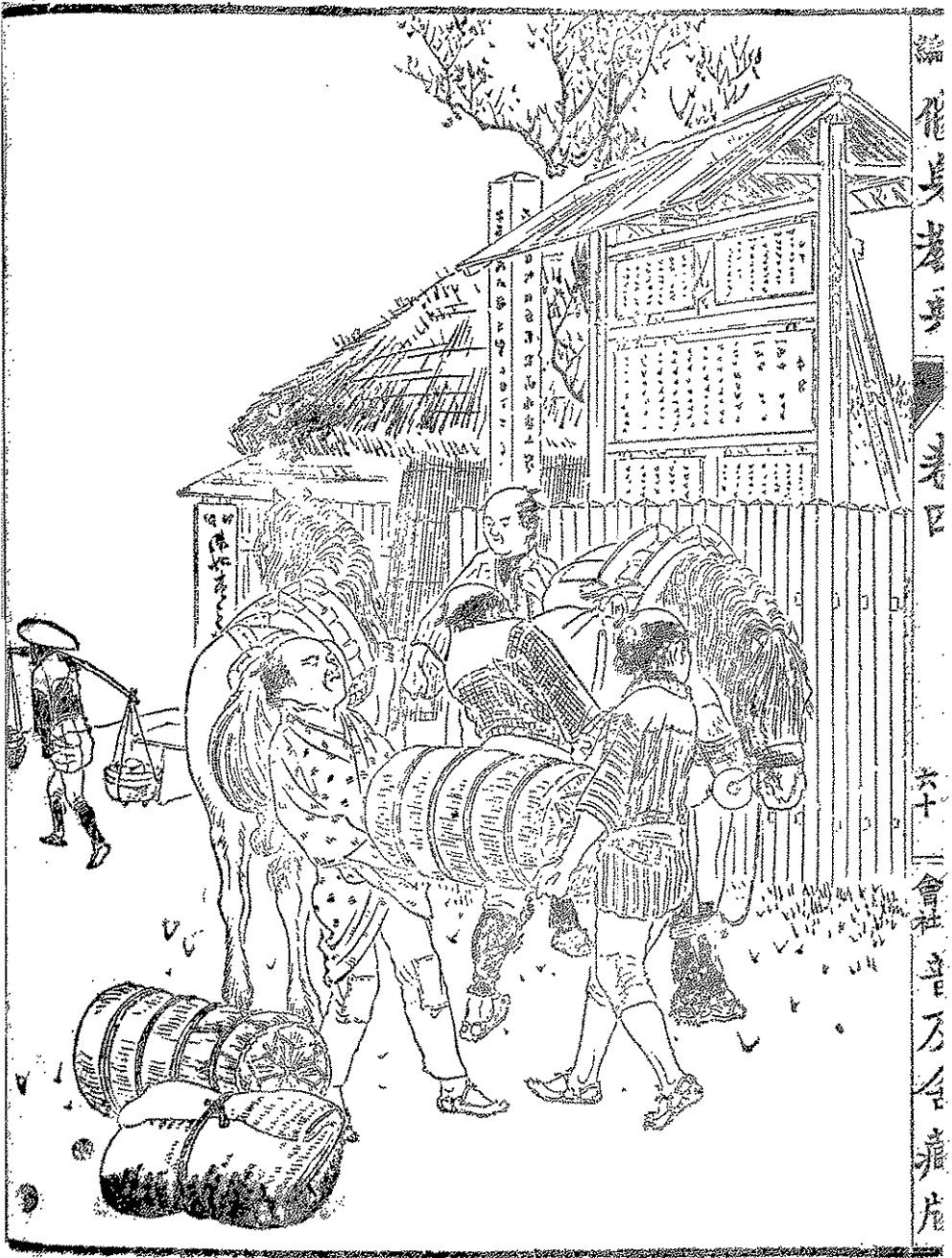
公あやしみて、鈴木氏のうちにゆき、その  
わけをたづねられしに、鈴木氏は、忍りよ  
もせず、「日ごろの御けいこをうかがひ奉る  
に、柔術のわけは、くはしく知らせたまふに  
も似ず、御わざまことに、つたなくおはすに  
よりて、かくはからひたり。」と申しけり。公は、  
きいて、「先生のあつき御志に、むくい奉らん  
ため、今より、いよく、この業をはげみ申さ

ん。と深く禮をのべて、かつられしが、その後つとめ勵まれて、終に三千の門人中、高弟の一人となられき。

第二十一課 白河樂翁公 (三)

公、父君の御あとをつぎて、大名となられし後は、領内の人民に御心をかけらるゝこと、まことに深かりき。

ある年のきゝんに、領内の村々、作物、みならず、うゑにせまりて、死ぬるもの多かりき。公、これをうれへ、江戸より、いゑふすま麥、昆布あらめなどを多く買ひあつめ、これを、白河に送りて、貧しき民に、分ち與へられき。されば、これがために、命を全うしたるもの、甚多く、又、道中のものも、この荷物のために、日々の業務を得て、大に、公のなさけぶかき徳をたいへき。



公は又、公益をはからんことを、心がけられ、或る陶器の商人に、家と元手とを貸し、又、其のわざにたけたるものを、尾張の瀬戸にやりて、其の業を習はしめ、或は、信州より、桑苗を買ひ入れて、養蠶をすゝめ、宇治より、茶の樹を取りよせて、製茶の業をおこし、漆器の職人を、會津より招きて、ぬり物の業をひらかるゝなど、大に、國の産物を、ふやされき。

第二十二課 公益を廣めよ

同じ市町村内に住めるものはたれかれのわかもなく、皆よく相愛し、相たすけ心を合せ、力を共にして、害となるべきものをのぞき、利となるべきことを起して、其の町村を榮えしめんことをはかるべし。

一、學校を盛にすること。

一、衛生上の注意を怠らざること。

一、物産を盛につくり出すこと。

一、道路交通の便をはかること。

一、水利の便をはかること。

一、共有物はわがものゝ如く、ていねいに取り扱ふこと。

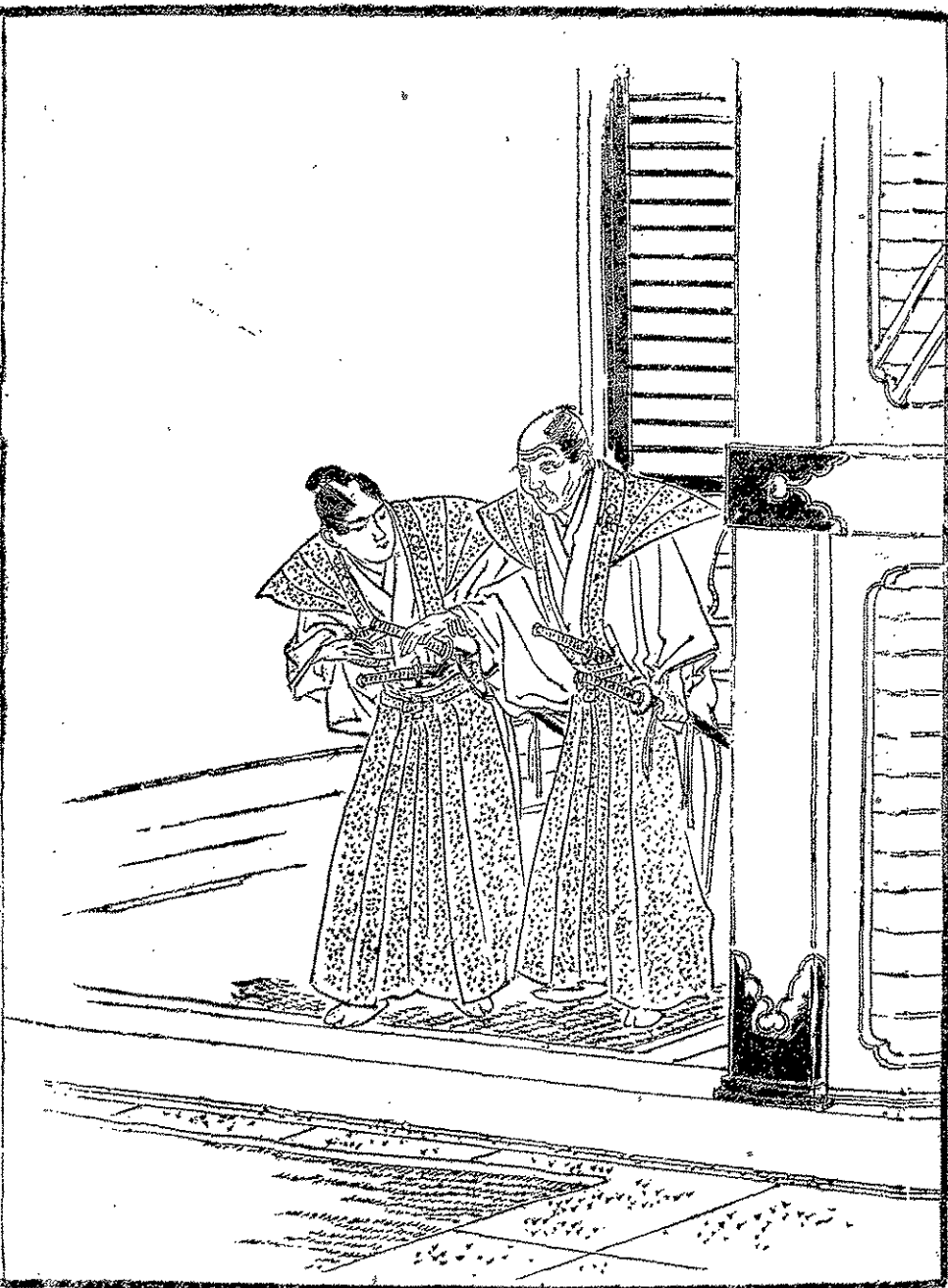
一、不幸のものを助くること。

第二十三課 白河樂翁公 (四)

公は、父母につかへて、孝順におはし、毎朝、

父母のいませるやかたに人をつかはして、  
其のごさげんをうかはしめ、使かつると  
きは必つぎの間に、出でつゝしみて、そのよ  
―すをたづねられき。

父君、中風にかゝられし時は、かたはらをは  
なれずして、かんびよ―せられ、病いえて、登  
城せらるゝよ―になりても、必ともをして、  
介抱せられき。



公は後に、あげられて、重き役人となり、よく政事につとめられき。

其の頃、京都に大火ありて、恐れ多くも、皇居も、焼け失せしかば、將軍はそのふしんのことを公にいひつけられき。公は、多くの大工に、その費用を見積らしめ、最高きものに、仕事を命じ、費用を惜まらずして、おごそかなる新殿を作りあげられき。

第二十四課 白河樂翁公 (五)

公は、天明のきゝんにて、人々大になんぎせるときに、家督をつがれければ、儉約の道を教へて、おごりの風を正し、人民をして、其の業に安んぜしめんと欲し、みづから、先ちて、節儉をつとめ、衣服、夜具などは、木綿にあため、食事も、朝夕は、一汁二菜、晝は、一汁二菜と定め、其の他の費用をも、儉約せられき。



其の後、公は老中となられて、江戸の悪しき風を改め、祭禮などの時に、無益のかざり、又は、はなやかなる衣服を用ゐることを禁ぜられき。

公は、又、町内の入費をはぶき、其の金にて、もみを買ひ、米倉にたくはつき、人のそなへとせられき。

されば、其の後、不作なる年には、この倉より、米を出して、貧民に、たきだしなどを與へたりきといふ。

明治五年、倉をひらきて、其の米を賣りはらひしに、その金高は、七十五萬圓にのぼり、今なほ、東京府の公有金となれりとぞ。

第二十五課 職業のたふときこと

職業は、身をおこすもとゐなれば、何人も、つとめざるべからず。其のつとむべき職業

は、各家につたはれるものを、うけつぐか、或は、自身のまなびたること、自身の好むところによりて、これをえらび、父母のゆるしをうけて、これを定むべし。

人の職業には、そのたぐひ多けれども、そのたふとさは、いづれも、おなじきものなり。世には、職業に、たふときと、いやしきとあるが如くに考へ、自身の職業を、かろんじ、おろそかにするものあり。まことに、大なる心得ちがひといふべし。

されば、人々、其の職業につきたる上は、十分、其の業をおもんじ、つとめはげみて、身を立て、家をとまし、父母の御心を、安んじ、たてまつるべきことなり。

かせぐにおひつく貧乏なし。

第二十六課 公衆衛生

傳染病はその初め、一人より起るものなれども、ゆだんするときは、多くの人に、迷惑をかくるに至るべし。

されば人々、平生左のことがらに、注意をおこたるべからず。

一、家のまはり、井戸、ばた、便所などを、すべて、せいけつにすべし。

一、ちり、あくたを、路ばたに、すつべからず。  
一、犬、猫などの死體を、河、池などに、すつべからず。

一、病人の、よごれ物を、みだりに、川に流し、又はきだめに、すつべからず。

一、傳染病人のあるを、かくすべからず。

第二十七課 外人に對する心得

去にし明治三十二年七月より、外國人も、

自由に日本國內にすむことを許されしゆ  
ゑわが國人はこれと交ることおひく多  
くなるべし。よりて、こゝに外人に對するに  
つきて心得べきことを示すべし。

一、たゞしき道を以てまじはり決して我  
が國のはぢとなるが如き行をなすべ  
からず。

一、みだりに外人をきらひ或は之をはづ

かしむるが如き行をなすべからず。

一、外人もしも無禮のふるまひありたる  
ときはよくそのわけを正しておだや  
かにかけあふべし。

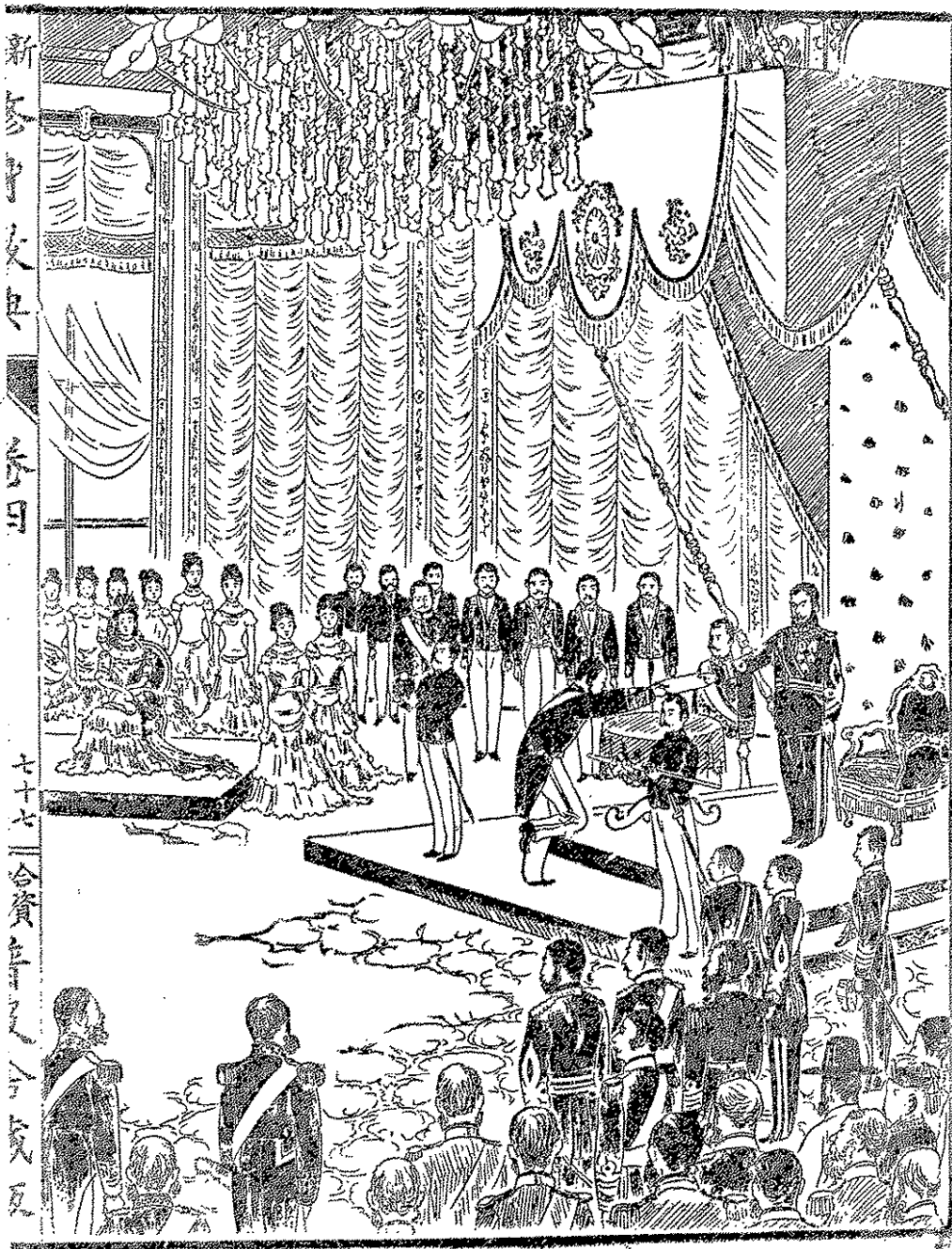
一、もし争ふべきことあらばよろしく公  
のさばきを仰ぐべし。

### 第二十八課 國民のつとめ

國民は第一に國憲を重んじ、國法に従は

ざるべからず。

國憲とは、わが帝國の憲法のことにして、わが國體、及政治法律のもとゐ、並に、臣民の權利、義務をしめしたるものなれば、よく之を心得て、立憲國の民たるに、背かざるべし。國法とは、即、各種の法律にて、人民のつとむべきこと、および行ふべからざることを、示したるものなれば、これ、亦心得おくべし。



次に、又國民として、つくすべき義務は、兵役に服すること、租税を納むることなり。今日は、太平にして、人々皆安らかに、くらすことを得れども、一旦外國との平和やぶるゝときは、忽戦争をひらくに至るべし。

この時よく、敵を破り、國を守りて、國家の安全をはかるは、軍人なり。されば、我が國の男子たらんものは、いさみ進みて、兵役に服せずば、あるべからず。

政府は、常に、多くの軍人をやしなひて、國を守らしめ、又常に、多くの役人を用ゐて、人民の生命と財産とを守り、且、國家の富強をはかれり。されば、わが國民は、身の分限に應じて、種々の税を納むべきなり。



新編修身教典尋常小學校用 卷四終

明治三十三年十二月十七日  
文部省檢定

明治三十三年九月十六日  
全三十三卷九月十六日發行  
全三十三卷九月十六日發行  
全三十三卷九月十六日發行

定價

卷一	金九錢
卷二	金十二錢
卷三	金十四錢
卷四	金十五錢
合計	金五十四錢

編者  
東京市日本橋區吳服町壹番地  
合資會社 普及舍編輯所

發行兼印刷者  
東京市日本橋區吳服町壹番地  
合資會社 普及舍

代表者  
右社長 山田禎三郎



發兌元  
東京市日本橋區吳服町壹番地  
合資會社 普及舍

